

平成 21 年 6 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19500657
 研究課題名（和文） 家族の生活時間の多次元解析用システムの開発
 —20年前の調査資料との比較を例に—
 研究課題名（英文） Development of multidimensional analysis system of time living with family.
 研究代表者
 谷村 雅子（TANIMURA MASAKO）
 国立成育医療センター研究所・成育社会医学研究部・部長
 研究者番号：90014191

研究成果の概要：家族の生活時間記録から、家族間の生活行動の関係や家庭環境の関与等の多次元解析が可能なデータベースシステムの作成方法を考案し、1987年の1歳6カ月児416名と親の調査資料をデータベース化して、子どもの対人経験について解析した。核家族で父親の帰宅が遅いと、対人経験の時間も相手も物理的に減少することが示された。更に、20年後の調査で、対人経験を減少させる要因が増えていることが示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：小児生態学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：乳幼児、ライフスタイル、生活時間記録、対人経験、テレビ、携帯電話、核家族、データベース

1. 研究開始当初の背景

近年、小児の夜更かし、睡眠不足、テレビ・テレビゲーム長時間使用、対人スキルの低下、孤食・欠食などの生活習慣の乱れやそれらによる健康障害が指摘され、その原因として我が国の生活の夜型化、父親の帰宅時刻の遅延、IT化などが推察されているが、改善策としては各家庭の養育意識、躰の問題として注意を喚起するに留まり、小児の生活習慣は急速に悪化している。各家庭の努力だけでは改善困難であり社会の変容を踏まえた行政的施策が必要と思われるが、政策提言に必要な生活時間の乱れとその要因(家庭・社会環境等)に関する客観的

な資料がない。

わが国の一日の生活時間調査はNHKにより5年ごとに大規模な調査が実施されて動向が報告され、また、総務省社会生活基本調査やベネッセ教育研究所でも小児の就寝時刻やメディア接触時間など特定の行動の所要時間が報告されている。しかし、いずれも個人単位の調査であり、生活行動の家族間の関係(誰が何をしている時に子どもが何をしていたかなど)や家庭環境との関係を検討した報告は殆どない。その一因は、個人単位で入力した生活時間記録の時系列データから個人間の関係を解析することが、市販の汎用解析ソフトの単純な利用では困

難であるためと考えられる。

市販の汎用解析ソフトを用いて、生活記録の時系列データを入力し、データ構造を再構築して多次元解析が可能なデータベースを作成する方法と解析方法を開発・提示すれば、生活時間記録調査に基づいた有用な資料が広く発表されるようになると思われる。また、20年前の調査資料が手元に現存するので、これをモデルとして用い、更に新たに調査を行えば、家庭環境と時代変化による社会環境の関与の両面からの解析が可能であり、結果そのものも小児と家庭の健全性獲得の為の政策構築に貴重且つ重要な資料であると考えられる。

2. 研究の目的

個人単位の家族の生活時間記録の時系列データを、汎用解析ソフトのみを用いて、生活行動の個人間(家族間)の関係などの多次元解析が可能なデータベースシステム化する方法を開発することを目的として、1987年に行った生活時間記録の調査資料をモデルとして用いて、データベース作成方法を考案・試行し、乳幼児と家族の生活時間と家庭環境との関係を解析して、データベースの有用性を検討する。

更に、社会・家庭環境の影響を明らかにして解決策を提言することを目的として、同一地域における現在の状況を調査して同様にデータベース化し、20年前の結果と比較する。

3. 研究の方法

(1) **モデル資料(1987年調査資料)**：1987年に2地域(A農村地区およびB近郊都市)の1歳6ヶ月健診対象児の保護者に依頼し、子どもの発達状況、養育環境、親子の平日一日の生活時間についての質問紙調査を行った。調査票は事前に対象児の家庭に依頼状と共に郵送し、健診当日に回収した(回収率75%)。生活時間記録は、図1のように、15分単位で、母親の生活行動と子どもが誰と何をしていたか、父親の主な生活時間についての記載を依頼した。

(2) データベース作成

①生活行動のコード化：NHK国民生活時間調査のコードに乳幼児関連コードを追加し、生活時間調査票(図1)に15分単位で記載されている母と子の生活行動をコード化した。②データベース作成(詳細は成果の項に記載)：市販のデータ分析用ソフトSPSSを用いて、子どもと母親の生活行動の時系列データと各家庭の属性データを入力し、SPSSコマンドでデータ構造を再構築し、親子間の生活行動の関係及び家庭の属性との関係が解析可能なデータベースを作成した。

図1. 生活時間記録調査票

お子さんの一日		母の一日	
6		6	朝食と弁当の準備
7	朝食	7	朝食
	父と遊ぶ		
8	TV	8	
	母を真似ながら遊ぶ(掃除)		洗濯・掃除
9		9	
	母とTV		TV

(3) **解析**：上記データベースとSPSSコマンドを用いて、1987年当時の親子の関わりについて、家族形態や父親の帰宅時間と母親の家事中の子どもの生活行動(誰と何をしていたか)、子どもの外遊び・テレビ視聴時の母親の生活行動などを調べ、親子の関わりに関与する物理的(時間的)要因を解析した。解析は、1歳5~7カ月児A地区221名、B地区195名を対象とした。家族形態は、母子のみ家庭(核家族で且つ児の就寝前に父親が不在)、三世代家庭、核家族で父親が帰宅していた家庭の3群に分類した。

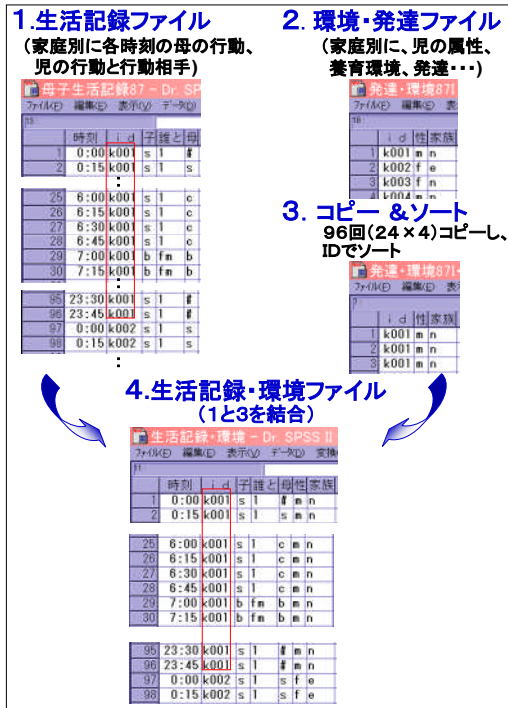
(4) **2009年調査**：上記結果を踏まえ、4ヶ月児および1歳6ヶ月児とその保護者の生活時間と養育環境等についての調査票を作成し、B地区の保健センターの協力を得て、4ヶ月及び1歳6ヶ月児健診の対象児について調査を開始した。調査票(無記名、自記式)を依頼状と共に保護者に郵送し、健診当日に回収した。解析対象は、これまでに回収された、保育園児を除く4カ月児86名、1歳6カ月児59名とした。

4. 研究成果

(1) 家族の生活時間記録の汎用解析ソフトによる容易なデータベース化と有用性

図2のように、「生活記録ファイル」に、家庭順に0時から24時までの各時刻における子どもと母親の生活行動コードをSPSSで入力した。時間を15分単位としたので、1家庭96行(4コマ×24時間)のデータが家庭順に並んでいる。「環境・発達ファイル」に各家庭の児の属性、養育環境、発達状況を家庭別に入力して、SPSSコマンドで96回コピーしてID(家庭番号)でソートした(「環境・発達ファイル-2」)。

図2. 家族の生活時間データベース作成



「生活記録ファイル」と「環境・発達ファイル-2」とをファイルの結合コマンドで結合し、各行に各時刻における母子の行動と家庭・児の属性が入力された「生活記録・環境ファイル」を作成した。

上記のように、各時刻における母親と子どもの生活行動とその家庭の属性（家族形態、父親の帰宅時間、子どもの発達状況など）が各行に並んだデータベースが、市販の汎用解析ソフトのコマンドのみで容易に作成できた。これを用いて次項の解析が容易に行なえ、有用性が示された。

(2) 1987年における対人経験と家族形態
①家族形態と対人経験時間

母子のみ家庭、核家族で父親が帰宅していた家庭、三世帯家庭の3群間で、母子の各生活行動と児の行動相手について一人当たりの平均所要時間を算出して比較した。

誰かと過ごした時間は、A地区においては、母子のみ家庭の児は7時間55分で、三世帯家庭(9時間51分)や核家族で父親が在宅していた家庭(9時間21分)に較べて1時間半以上少なく、一人で過ごした時間は1時間半以上長かった(表1)。B地区においては、母子のみ家庭の児は8時間43分で、三世帯家庭(9時間8分)や核家族で父親が在宅していた家庭(9時間10分)に較べて約30分少なかったが、一人で過ごした時間は差がなく夜間睡眠時間が約30分長かった。両地区とも、核家族で父親の帰宅が遅い家庭では子どもの対人経験の時間が少なくなっ

表1. 家族形態別、誰かと過ごした時間

		母子のみ	核家族で父が児の就寝前に帰宅	三世帯家庭
A地区	一人で	3:17±1:37	2:38±1:40	1:59±1:36
	誰かと	7:55±2:01	9:21±1:45	9:51±2:02
B地区	一人で	2:50±1:34	2:48±1:38	2:49±2:02
	誰かと	8:43±1:57	9:10±1:47	9:08±2:10

図3. 児の行動別、誰かと過ごした時間

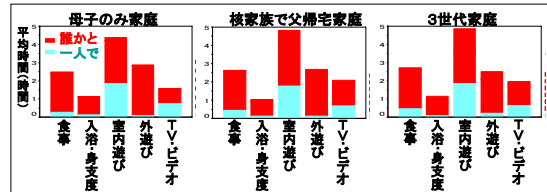


図4. 児の行動別、相手別、過ごした時間

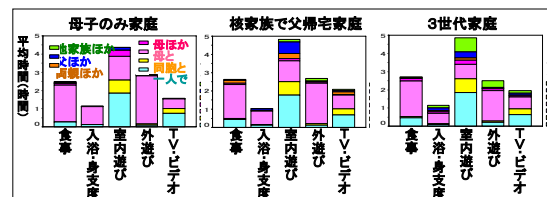
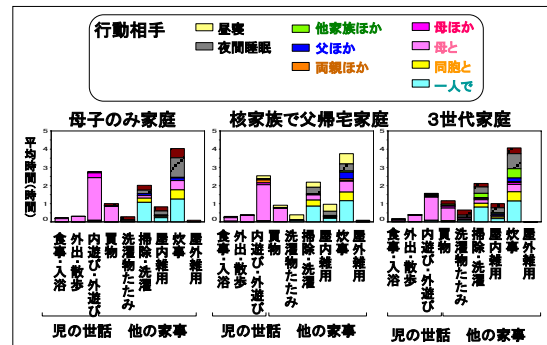


図5. 母親の家事別、児の行動相手



いた。

以下、両地区とも同様の結果が示されたので、図はB地区の図を載せる。児の行動別に見ると(図3)、母子のみ家庭は他の2群より、室内遊びとTV視聴時に誰かと過ごした時間が短く、食事、身の回りの世話や外遊びについては差が無かった。共に過ごした相手は(図4)、母子のみ家庭ではいずれの行動も母親ときょうだいのみで、他群では父や祖父母、それらの知人、いとこ、子どもの友達など多様であった。母親の行動別に見ると(図5)、炊事、洗濯・掃除の時に、児が誰かと過ごした時間が少なかった。

このように、家族形態に関わらず、母親は子どもの世話の他、屋外の用事には子どもを同伴しており、屋内の家事中に他の家族が不在であると、子どもは一人遊びや一人視聴を余儀なくされ、対人経験が物理的

に減少するものと推察される。

③父親との関わり

父親が 21 時以前に帰宅した家庭で 78.8%、21 時以降で 40.2%で、父親は在宅していれば子どもと関わりをもつことが示された。父親が 21 時以前に在宅していた家庭の児は殆どが 21 時以前に父親と遊んでいたが、21 時以降の家庭では 24 時半まで遊んでいた。

核家族化、父親の帰宅の遅延化、地域の対人関係の希薄化、IT 化が進行する現在は、家庭でも対人スキルの学習の機会が減少していると予想される。現在、20 年後の実態を調査中であるが、生活時間の解析に耐える例数に達したら詳細に解析し、幼少期の対人経験が社会変容により物理的に減少していることを確認したい。幼少期の対人経験の物理的減少を家庭も社会も認識し、社会の変化に応じた育児支援策を講じる必要がある。

(3)2009 年調査

1987 年の調査結果から、核家族化と父親の帰宅時間の遅延化の進行に伴って、20 年後の現代は、幼少期から対人経験が全国的に減少していることが予想された。対人経験の欠如に起因すると思われる子どもや若者の問題が社会問題化しており、対人経験の減少問題の重要性が浮き彫りとなった。家族形態に加えて、映像メディアの急速な開発・普及で助長されていると予想される。そこで、4 カ月児及び 1 歳 6 カ月児の発達と親子の IT 接触状況に関する調査票を作成し、生活時間記録と合わせて 20 年後の B 地区において調査を開始した。

現在までに収集された資料では、4 カ月児 86 名に TV を見せる家庭は少ないが(21.2%)、近くで長時間付いている家庭は少なくなく(平均 3.6 時間)、また、母親が授乳中に時々、またはいつも使用する率は TV74.2%、携帯電話 53.0%と一般化していた。これらの IT 接触時間が長い家庭の方が、児の感情表出や外界への興味が少ない傾向がみられ、映像メディアが親の視線を奪うことによる影響の可能性が示唆される。保育園児を除く 1 歳 6 カ月児 59 名では粗大運動、微細運動、親への働きかけ、有意語出現、他児への興味などの各項目の遅れ児の方が児の近くで TV が付いている時間が長かった。半年後に追跡調査を予定している。

直接の関わりが重要な乳幼児期の対人経験の減少を認識する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ①谷村雅子、大熊加奈子、小児を取り巻く環境の変化 言語発達とメディア視聴との関係。JOHNS. 査読なし。24、2008:853-857.
- ②谷村雅子、大熊加奈子、現代社会における映像メディアと親子のコミュニケーション。小児心身症研究。査読なし。2008:7-14.

[学会発表] (計 6 件)

- ①大熊加奈子、谷村雅子、20 年前の日本における 1 歳半児の家族との関わり。日本発達心理学会第 18 回大会、埼玉、3 月 21 日、2007.
- ②大熊加奈子、谷村雅子、家族形態と乳幼児の対人経験。第 54 回日本小児保健学会、前橋、9 月 21 日、2007.
- ③谷村雅子、大熊加奈子、家族の生活時間記録のデータベース化一家事中の 1 歳半児の行動と家族構成との関係の解析を例に一。第 54 回日本小児保健学会、前橋、9 月 21 日、2007.
- ④谷村雅子、大熊加奈子、20 年前の 1 歳半児の対人経験と家族形態。日本発達心理学会第 20 回大会、東京、3 月 24 日、2009.
- ⑤谷村雅子、大熊加奈子、1 歳半児がテレビの近くで過ごす時間と発達。第 56 回日本小児保健学会、大阪、10 月、2009.
- ⑥大熊加奈子、谷村雅子、IT 時代の赤ちゃん。第 56 回日本小児保健学会、大阪、10 月、2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷村 雅子 (TANIMURA MASAKO)
国立成育医療センター研究所・成育社会
医学研究部・部長
研究者番号：00014191

(2) 研究分担者

大熊 加奈子 (OKUMA KANAKO)
国立成育医療センター研究所・成育社会
医学研究部・流動研究員
研究者番号：00399487

小坂谷 典子 (KOITAYA NORIKO)
国立成育医療センター研究所・成育社会
医学研究部・共同研究員
研究者番号：10341827